

研究要旨

地域 HIV 看護の質の向上と拡大戦略に向けて、①介護保険施設で勤務する看護・介護職への研修を企画・実施、② HIV サポートリーダー養成研修の受講生募集地域を大阪府内から近畿ブロックに拡大、③学校基盤の HIV 予防教育の強化のために、養護教諭養成課程を担当する教員との協力的体制作りを行った。研究テーマである、介護施設への啓発と高等学校での HIV 予防教育を支える看護職のボトムアップについての基盤ができつつある。

研究目的

介護保険施設における HIV 研修を企画・実施・評価する。

研究方法

HIV 研修前後の知識・態度の変化をアンケート調査し、研修後3ヶ月の感想をインタビュー調査で明らかにした。

(倫理面への配慮)

アンケート・インタビュー調査の実施にあたっては、学会や報告書において内容を発表することについて了解を得たうえで、協力は自由意志であること、匿名での記入であること、語った内容については、個人が特定されないように配慮すること、希望時は調査結果を知らせること、個人情報保護について説明をおこなった。調査は大阪府立大学大学院看護学研究倫理委員会の承認を受けて実施した(承認番号 27 - 25)。

研究結果

I 介護保険施設で勤務する看護・介護職への研修を企画・実施

1. DVD 教材「介護職として知っておきたい 10 のこと」制作のねらい

1980 年代のエイズパニック時の情報をそのまま持ち続けている者が多いので、誤った知識や偏見を取り除き、HIV 陽性高齢者の介護保険施設での受け入れを促進する。

2. DVD の内容 (上映時間 25 分)

- ①最新の HIV の治療・予後を知り、長期療養が可能な HIV 陽性者の高齢化が進み、HIV 陽性者も介護の対象であることを伝える。
- ②HIV はスタンダードプリコーションの範囲で施設内感染や職業感染を予防でき、特別な準備は不要であることを伝える。

③スタンダードプリコーションについて、イラストでわかりやすく伝える。

④生活援助をする上で、手袋が必要な場合と必要ない場合を具体的に伝える。

3. 介護老人保健施設職員の研修の企画

「エイズ研修 自分と相手を大切にできる性のはなし」

DVD で上記の①～④を確認したうえで、下記の内容を加えた。

- ① 性はよりよく生きるうえで、最大のエネルギー
- ② 性の多様性
- ③ 高齢者にとっての性
- ④ 性感染症の予防 (コンドーム装着実演)

4. 研修の結果

研修の概要

- 平成27年5月18日(月) 18:00-19:00
- A介護老人保健施設 奈良県北葛城郡

入所 80名
 一般(2階)/40名
 一般(3階)/40名
 通所リハビリテーション 40名

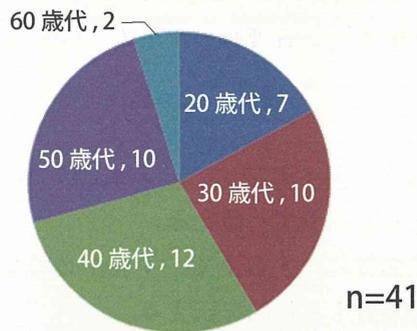
- 職員数 約100名



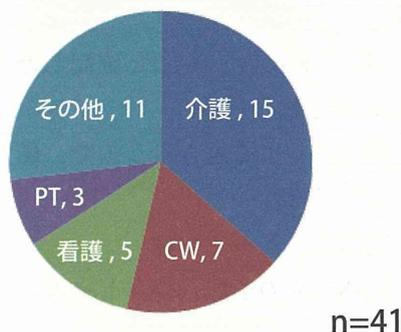
<研修直後のアンケート調査結果>

研修後のアンケート結果

・参加者 50 名 回収数 41 回収率 82%

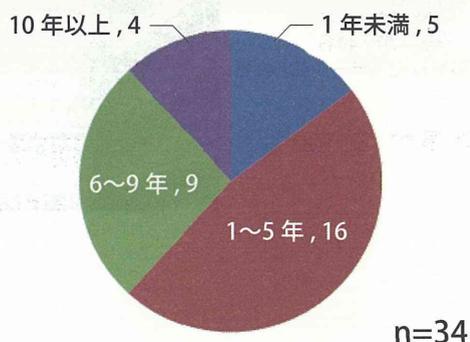


参加者の職種



参加者の年齢は、20 歳代と 30 歳代で、41%であり、若い世代の介護職員が増加している。参加者の半数が介護職であり、看護職・PT・事務職員が参加していた。

介護経験年数



介護経験年数が 5 年以下の者が 62%であり経験の浅い職員が多かった。

研修前後で変化が大きかった項目

「おおいにそう思う」人数 研修前:研修後

- ・ HIVに感染しても、薬を飲み続ければ、長生きできる 5:29
- ・ HIVの感染率は、B型C型肝炎よりもずっと低い 5:25
- ・ 握手する、軽いキス、一緒に食事をするので、HIVに感染することはない14:3
- ・ HIV陽性者の入所・利用希望があれば受け入れたい13:29
- ・ HIVは便・尿・汗の中にはいない 11:28
- ・ HIV感染を理由に就労を拒否するのは人権侵害である 15:28
- ・ HIVの予防にコンドームは有効である 18:30
- ・ 同性愛は異常なことではない 10:21
- ・ HIV感染を理由に介護を拒否するのは人権侵害である 21:36

研修後の感想(自由記載)

- ・ B型肝炎、C型肝炎よりHIVの感染率が低いことを初めて知りました。施設での受け入れも可能だと思いました。(看護師)
- ・ HIV=エイズではないことがわかりました。(看護師)
- ・ もっとひどく重い病気だと思っていました。(介護職)
- ・ 今後、HIV感染者でもスタンダードプリコーションを行なうことにより、仕事ができると思う。(介護職)
- ・ 永らくお世話になっていなかったコンドームの知識を新しくすることができました。ありがとうございました。(介護職)
- ・ 性的見方が変わりました。(介護職)
- ・ 予防が大切だと改めて理解しました。(会社員)

<研修3ヶ月後のインタビュー調査結果>

介護職 3 名、看護師 3 名に個別に半構成的インタビュー調査を実施した。

インタビュー内容は、研修の感想、HIV についての認識やイメージの変化、HIV 陽性者の対応についての気持ちの変化、HIV 陽性者の受け入れについて、今後 HIV 陽性者の受け入れを円滑に行うために必要なことについて、思いつくままに自由に語るものであった。語られた内容をその場で許可を得てメモをとり、KJ 法で分類した。

HIV/ エイズのイメージの変化:

- ▷ 理学療法士の養成学校でエイズに関する講義はなかった
- ▷ 介護の専門学校では、教科書の内容だけで、エイズのことは学習しなかった
- ▷ 介護の勉強の中でも学習しなかった
- ▷ エイズに関しては看護学校で少し習っただけ
- ▷ エイズは助からない病気というイメージだった
- ▷ エイズについては、テレビのニュースで学んだ
- ▷ エイズに関しては、興味がなかった

- ▷ エイズのことは漫画やテレビのニュースで知った
- ▷ キスしてもうつるし、唾液をさわるのもだめだと思っていた
- ▷ ゲイの人の病気というイメージ
- ▷ セックスだけからうつるんだとわかった
- ▷ スポーツ選手が HIV 陽性であることを告白して、おどろいたことがあった
- ▷ 自分の中では、エイズは男性同性愛者の病気
- ▷ セックスでうつりやすいということだが、本当はどうか
- ▷ エイズは簡単にうつらないし、思ったよりもこわくないとイメージが変わった
- ▷ C型肝炎と同じだと思った
- ▷ 肝炎ウイルスよりも感染率が小さいことがわかった

スタンダードプリコーションについて：

- ▷ スタンダードプリコーションはきちんとできている
- ▷ 介護現場で手袋をするのは当たり前
- ▷ 他の感染症の場合でも、次亜塩素酸による消毒がちゃんと出来ている
- ▷ 手袋の使用について、上司と相談したい
- ▷ 病院での勤務時代から、注射や採血の時に手袋はしていない
- ▷ 真空採血ではなく、シリンジで採血している

HIV 陽性者の受け入れ：

- ▷ HIV 陽性者の受け入れは大丈夫
- ▷ HIV 陽性の高齢者の利用希望があるということも理解できた
- ▷ HIV 陽性者の利用は問題ない
- ▷ HIV 陽性者の利用も大丈夫
- ▷ PT としてリハビリの場面でしか接さないので問題ない
- ▷ 介護施設の受け入れについては問題ない

性教育の必要性の理解：

- ▷ 性教育が大切
- ▷ 昔よりもずいぶんオープンになっていると思った
- ▷ これまでの人生できちんとした性教育はなかった
- ▷ はじめて聞く内容だった
- ▷ 友人や同級生からの情報で、コンドームについても知った
- ▷ コンドームは着けないといけない
- ▷ セックスのときもコンドームによって防ぐことが

できる

- ▷ ペニスモデルやコンドームサンプルによる実演もはじめてだった
- ▷ 祭りのことや神社のことなどもおもしろかった
- ▷ 性行為のときに注意すればよいとわかった
- ▷ 最近のことはスマホなどで情報を得る
- ▷ 日本の祭りのことなどが印象に残っている
- ▷ 奈良には性器の御神体はないと思う
- ▷ 日本の性の文化の話がおもしろかった
- ▷ 男性同性愛については、同性婚などがニュースにもなって、社会が変わってきた

高齢者の性について：

- ▷ 施設内で、認知症の利用者から、女性スタッフへのセクハラ行為はあるが、認知症としての対応をしていて、大きな問題にはならない
- ▷ 施設利用者からのセクハラ発言や行為も報告されるが、「元気がある証拠」と理解している
- ▷ 施設利用者のマスターベーションについて、報告されることはあるが、問題はない
- ▷ 入居者同士の恋愛問題やセクハラトラブルは聞かない

研修の希望・課題：

- ▷ 入職してきたときに、研修としてエイズのことを知る必要がある
- ▷ エイズについての研修は必要
- ▷ B型・C型肝炎のこともまじえて研修をうけたい
- ▷ エイズだけでなく、B型肝炎やC型肝炎や梅毒についても知っておきたい
- ▷ 看護師の仕事として、採血や点滴注射、血糖測定などがあるので不安
- ▷ 研修では他の感染症よりうつりにくいと聞いて安心した
- ▷ 研修は平日夜の6時からの1時間でよかった
- ▷ 研修を受けるときに男女別々に分かれて聞いたほうがよかった（男性）
- ▷ 男性は笑っていたが、女性ははずかしそうだった（男性）
- ▷ 大切になってくるのは、医師と看護師と介護士の連携

5. 考察

- ①「HIVに感染＝エイズ＝死ぬ」イメージが強いので、正しい知識を提供する必要がある
- ▷ 介護職養成機関(近畿ブロック内に52課程)では、

HIV 感染症についての十分な教育がおこなわれていないので、来年度は作成した介護職向け DVD 教材を配布し、啓発・アンケート調査を企画する。

② 最新の情報・正しい知識を得る機会があれば介護職の HIV 陽性者の受け入れは良くなるので、定期的な職員研修に HIV 研修を加える。

▷ 今度も介護職対象の研修等を実施し、共通で使用するアンケート調査内容を検討する。研修の内容は HIV/エイズに特化したものではなく、スタンダードプリコーションや感染経路別の対策をメインに伝える。HIV 陽性者のケアはスタンダードプリコーションの範囲で十分であることを強調したい。

③ 家庭での性教育や性感染症予防についての内容も研修に加える

▷ 20～30 歳代の介護職員が多いので、本人が性感染症に罹患する可能性があり、子どもを持つ職員は子どもへの性教育の機会があるので、自分や家族のための性教育の内容を含める。

④ 看護職の針刺し事故時の対応を強化する

▷ 医師や看護職が安心して HIV 陽性者を受け入れられるように、針刺し事故の実態や予防内服のことを伝える。

II HIV サポートリーダー養成研修

今年度も 2 回の 3 日間研修を実施し、これまでの 11 回で受講者数は 205 名である。HIV 感染症の医学的な情報だけではなく、幅広くセクシュアリティ教育として「性の多様性」「思春期からの性感染症・避妊」の内容も含め、楽しいアクティビティを盛り込んだ楽しい研修という評判が広がってきた。

看護師養成機関においても HIV 感染症については十分な内容を教育されていないので、研修には看護学部生を含めて看護職のボトムアップを今後も図る。

研修の修了生には、出前講義への参加や HIV ネットワーク会議への参加を勧めている。研修の講師として講義をおこなう機会を今後も作っていき、一般の看護職が高校への出前講義や研修など、病院以外の場面で活躍できる場を提供する。

別添アンケート調査結果を参照。

III 学校基盤の HIV 予防教育の強化

日本養護教諭養成大学協議会に所属している大学

は、近畿ブロック内に 26 施設ある。新たに研究協力者として大学教員 2 名を要請し、教育課程にある在学生や卒業生の研修などで、啓発をおこなう。

これまでに HIV サポートリーダー養成研修を修了した看護師・助産師のいる病院をマッピングし、出前講義を希望する学校とのマッチングを行なっていく。

考察

介護保険施設での HIV 陽性者の受け入れを促進するための研修にはじめて取り組んだ。ストレスの高い介護現場では、入居者への虐待問題も数多く報道された 1 年だった。入居者へのケアの向上を図るとともに、介護・看護職が幸せになるための内容も研修に盛り込むことが必要である。自分のセックスライフが豊かになり、家族や子どもの性教育の知識も研修で伝えていく。

HIV サポートリーダー養成研修と高校生への出前講義、大阪府看護協会が主催する看護職研修、大阪府教育委員会が主催する研修は、次年度以降も実施していく。

結論

看護・介護・学校現場でのケアと予防の拡大のための基礎作りが出来つつあるので、残りの 2 年間は具体的な実践を粛々と続けていく。

健康危険情報

該当なし

研究発表

1. 論文発表

該当なし

2. 学会発表

佐保美奈子、古山美穂、山田加奈子、高知恵、工藤里香、介護保険施設を対象とした HIV 職員研修の検討。第 29 回近畿エイズ研究会、2015 年 6 月

佐保美奈子、古山美穂、山田加奈子、高知恵、泉柚岐、西口初江、白阪琢磨、介護老人保健施設でのエイズ研修の検討。第 29 回日本エイズ学会、2015 年 11 月

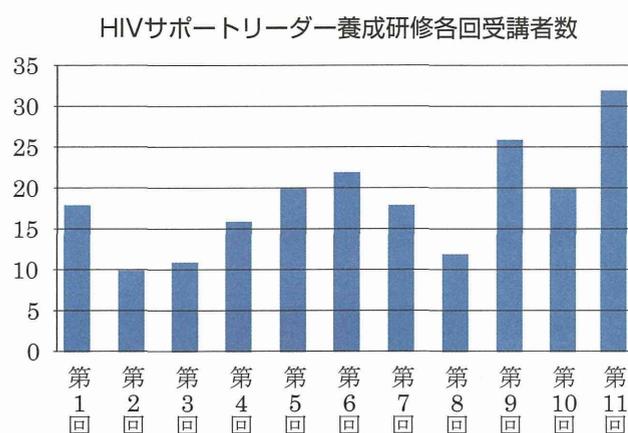
知的財産権の出願・取得状況（予定を含む）

該当なし

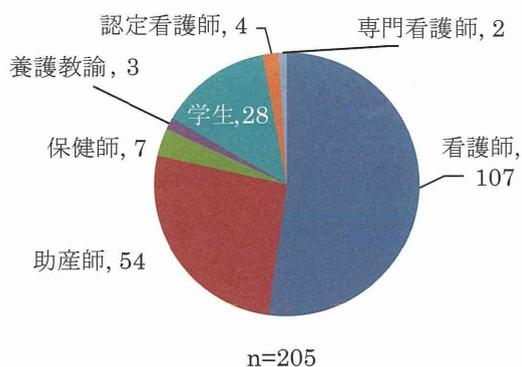
HIV サポートリーダー養成研修のまとめ

1. 受講者数

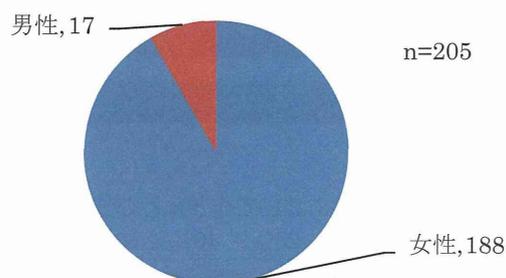
これまでの受講者数は205名である。



2. 受講生の職種



3. 受講生の性別

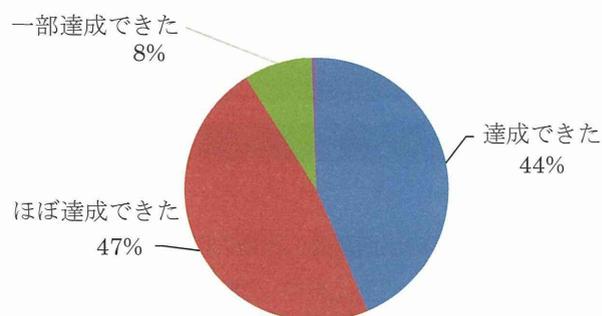


4. 調査票の回収数

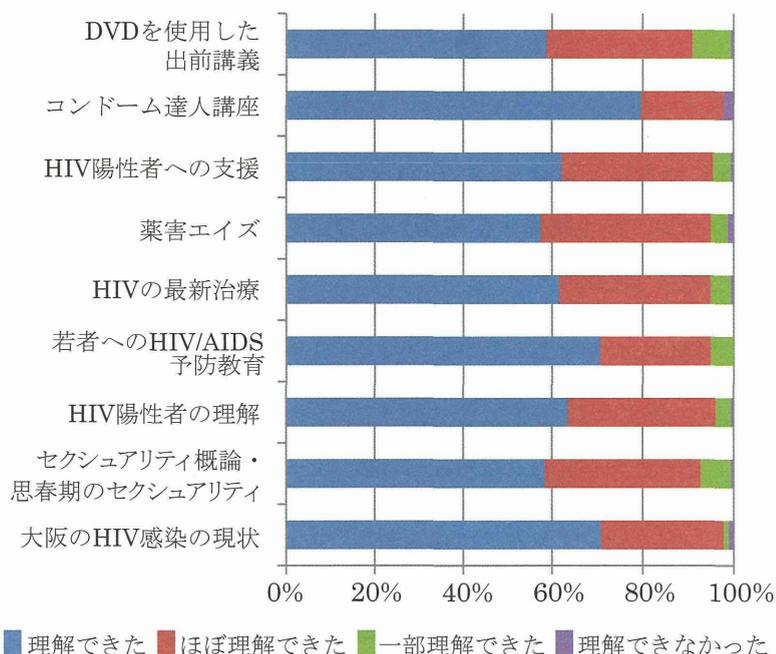
参加者205名 回収数179 回収率87.3%

5. 研修目標の達成度

研修目標：セクシュアリティ、HIV感染症について広く学び、HIV陽性者への初期対応、高校生へのHIV予防出前講義に必要な態度・知識・技術を得る

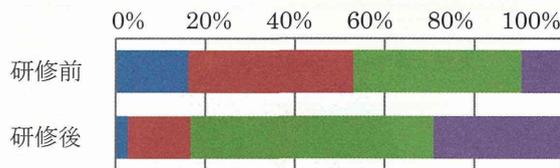


6. 講義別理解

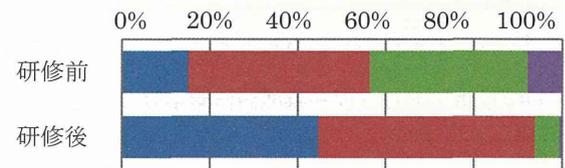


7. 態度の変化

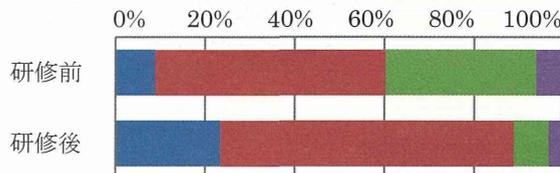
性のことを人前で話すのははずかしい



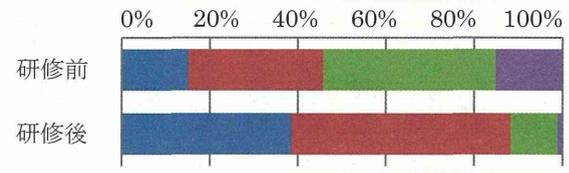
セクシュアルヘルスの増進について学びたい



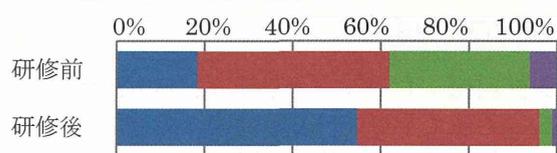
自分自身の性についてきちんとむきあっている



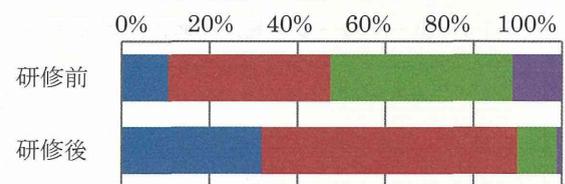
自施設で、HIV陽性者のケアへの準備をしたい



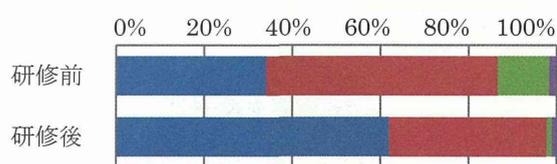
HIV看護について興味を持っている



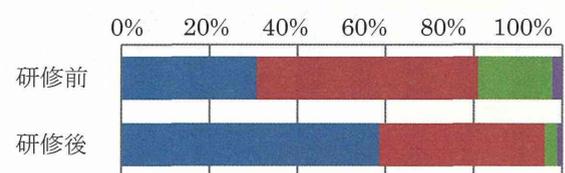
グローバルな広い視点で看護を考えている



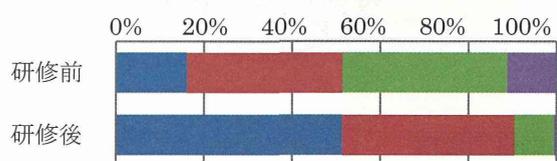
性欲は基本的な欲求の一つであり大切にしたい



他者と深く関わることは喜びである



HIV予防教育の出前講義に積極的に関わりたい



■ 大いにそう思う ■ そう思う ■ あまりそう思わない ■ まったくそう思わない

8. 自由記載 (第10回・第11回分のみ)

1) アクティビティー (フリスビー・感染シミュレーション・粘土制作・自由画) について

- ① からだを動かしたり、絵にしたり、粘土制作したりするのは、すごくたのしく学ぶことができました。普段、絵にしたりすることがないので、苦手でしたが、描いたりすると楽しくできました。
- ② 大変楽しく、効果的だと思いました。自分自身を表現することが久しくなかったので、アクティビティーを通して何かを発散させられました。何よりも良かったのは、他の人の作った物を見て、題材が同じなのに、完成品がどれも違い、あらためて、自分=他者ではなく、私以外は私ではないということ、思い出すことができました。

- ③ フリスビー楽しめた。アクティビティーの方法など、具体的に体験でき、勉強になった。
- ④ 粘土、自由画について：自分の内なるものを形に表現するという行動自体が大人になると減ってくるので、とても新鮮な気持ちで楽しかった。シミュレーションについて：私も生徒時代にやってみたかったです。フリスビー：アイスブレイクの目的ならば、メンバーを変えてやってみてもいいのでは？
- ⑤ 普段の業務では出来ない事で、童心に帰ったようで新鮮でした。手や体を動かしながらの人との関わりがとても大切だと感じました。思いや考えを形にする難しさも感じました。
- ⑥ アクティビティーで体を動かすことで理解がすすんだ。また、講義のヒントを得る事ができた。特に粘土制作

- は立体的に、そして色も付けるとなると、非常に難しく感じた。
- ⑦ 感染シミュレーションは、院内研修でもしてみようと感じました。(近々 HIV / AIDS 研修のプレゼンをするように依頼を受けていたので、いいタイミングでした。) また、粘土制作も、ひとつのテーマで多彩な考えがあり、世界が広がったような気がしました。
- ⑧ 実際に感染シミュレーションを行ない、気づかないうちに感染しているんだと恐ろしい程実感しました。
- ⑨ 講義だけでなく、感染シミュレーション、粘土制作も今後の研修企画に役立つ。
- ⑩ 久しぶりにアクティビティーをするので、最初はとまどいもあったが、するに従い自分の気持ちや考えを改めて見直す機会になったと思う。他の人の作品を見て、同じ講義を受けていても様々な受け取り方や、重要とするポイントも異なるので、興味深く感じた。
- ⑪ 自分の考えや思いを形や図に表す機会が今まであまりなかったので、今回自分の気持ちに向き合うきっかけとなり、よかったです。
- ⑫ 合間、合間にアクティビティーを取り入れられ、3日間とても楽しく受講することができました。研修前はプログラムを見て、「自由画って何?」「フリスビーって何?」と疑問だらけでした。でも受けてみて納得!! こんな研修をしなければいけないんだなーと思いました。
- ⑬ 粘土の学習だけでなく、シミュレーションなどを通して、感染経路について学べました。
- ⑭ 自分の考えを物や絵で表現するというのをずっとしていなかったため、とても難しかったです。でも、実際に作ることで、今まで以上に考えるきっかけになったのでよかったです。
- ⑮ 感染シミュレーションはわかりやすく、楽しくて、年齢関係なく学べると思う。粘土制作や自由画は苦手であり、正直あまりしたくなかったが、上手下手に関係なく作成することで、今の自分の考え方を整理できたり、他の人の考え方をしれてよかったと思う。
- ⑯ フリスビーは運動になった。感染シミュレーションは、大学生を対象として実施しても面白いのではないかと考えたので、一度講義でやってみようと思う。粘土はむずかしかったが、他の人の作品を見て、いろいろな考えがあることが参考になった。自由画は学生に対しても書かせてみようと思います。
- ⑰ 粘土制作や自由画は発想力の乏しさを実感し、冷や汗ものでしたが、楽しくもありました。フリスビーで一気に他の受講生の方と話しやすくなり、フランクな感じになりました。シミュレーションは理解を深められたと思います。
- ⑱ 感染シミュレーションはイロイロ考えることが多かったです。机上の学習と違い、忘れないと思います。粘土やクレヨンも久しぶりにさわって、とても楽しかったです。自分の頭の硬さにちょっとがっかりしました。
- ⑲ いろいろな方と関われるので、楽しく参加できました。
- ⑳ 一緒に活動することで、話しやすい場をつくることができたので良かった。
- ㉑ 体験を通して、自分の気持ちを深く考えることができたので、良かったと思います。また、フリスビーや体験を通して他の方と交流することができ、楽しかったです。
- ㉒ 人によって、得意なもの、苦手なものは違うので、アクティビティーによって自分を表現し、それを言葉にすることはとても良い作業だと思いました。また、感染シミュレーションは学生にもわかりやすく、イメージしやすいと思います。
- ㉓ 「性」という一言の課題に対して、様々な作品が作られていたことに、驚きと自分の考えの狭さを感じました。美術が苦手なので、ちょっと嫌だなと最初は思っていました。一人ひとりが違うんだということを学べた良い機会だったと思います。感染シミュレーションは病棟でやってみてもおもしろいだろうと考えていました。
- ㉔ アクティビティーを行なったことで、学んだことの印象が深く残り、知識を今後の看護活動により生かしていけると思いました。また、率直に工作が楽しかったです。
- ㉕ 感染シミュレーションはすごくよく感染の広がりが再現できていると思いました。自分を皆の前で表現することが、すごく苦手なので、恥ずかしかったけど、いろいろな意見を聞いてよかった。
- ㉖ 感染シミュレーションは視覚的に確認できて、とても興味深かったです。どこかで使ってみたいと思いました。粘土制作、自由画は他者理解につながり、作品・絵を通して発表することで気軽に飾ることなく発表できるところが良い点だと思いました。
- ㉗ フリスビー・感染シミュレーションはおもしろかった。感染シミュレーションに関しては、院内でやってみようと思った。粘土や自由画についてはクリエイティブなものを持ち合わせてない私には苦痛でした。
- ㉘ 感染シミュレーションは感染のさまざまなイメージをもちやすいワークと感じた。粘土・絵と自分のためにこんな遊び心いっぱい時間を持つことがないので、とてもよかった。フリスビーはしゃべるきっかけ作りとなり、自分から人の中にコミュニケーションをはかるのが苦手な自分としては、うれしかった。
- ㉙ おもしろかったです。粘土制作自由画は、自分のものを作成するものもおもしろかったです。他の人の作品・プレゼンを聴くのがとても興味深かったです。
- ㉚ 苦手意識が先行し、心に「さあ!!」と掛け声をかけて参加した。一方には、「今の自分はこんなもの」「良

くも悪くもない、、、」という気持ちもあった。粘土や自由画は、創造性も無く、学習内容ともあまり関係ない自己中心なものだったと思っている。それも自分、、、。研修に参加して、次の行動へのエネルギーがすぐ出るものではないけど、自分に「さあ!!」の掛け声をかけられるだけでも良かった。

- ③① フリスビー：何のため？と思っていた。高校生と交流するため？ではなくて、全て（自分の思いは言葉にして正しく伝えること、その他のいろいろなものごと）自分の思いとはちがう方向に入ってしまうことが、ほとんどであることに気づかされた。自分が正しいと思っても、相手はそのように受け取らない事も多々ある。でも、行動しないと何も起こらないことを再確認できた。（frisbeeだけではなく、この3日間で）
感染シミュレーション：『ウラ』を知りたい。
粘土・自由画：苦手で少し辛かったけど、楽しかった。
- ③② 体を動かしたり、視覚で確認できたことは、頭で理解していることと違うということを実感した。自分と他者の違いを改めて理解できる助けになった。
- ③③ どの講義も非常に身になる内容でした。3日間、本当に感謝いたします。
- ③④ フリスビー：思うようには気持ちは届かないということ学んだ。感染シミュレーション：どこの誰から感染しているのかわからない。予防対策の必要性を学んだ。粘土：「性とは」の皆さんの作品が力作すぎて、びっくりしました。自由画：色んなひとの意見や気持ちが聞けてよかった。
- ③⑤ 「性とは」という表現がとても難しく感じました。みんなの作品を見て、すごく刺激になり、さまざまな考え方があるんだなーと感動しました。
- ③⑥ 感染シミュレーションで、水を使ってやって、二人しか感染源がないのに、14人も陽性の人が出て、おどろいた。目に見えてわかりやすくて良いと思った。粘土や自由画ははじめはどうしたらいいかわからなかったが、作っているうちに楽しくなってきた。他の人の作品を見て、本当に人それぞれ感じていることはバラバラで十人十色だと思った。
- ③⑦ 目に見える形での感染シミュレーションでは、数字だけで感染がどのくらいあり、なぜ予防しなければならぬのかを具体的かつ視覚的に体験できたので、良かった。また粘土や絵は想像以上に自分の思っていることを表現することは難しいことであると感じた。自分でも自分のことがわからない時もあるのに、他人のことは全部わからないし、でも、わからないからこそ受け止めることは大切であって、十人十色の心を持つと思った。
- ③⑧ 感染シミュレーションでは、視覚的に感染拡大の危険について捉えることができ、とてもよかった。1回の性交で感染の危険性についてもしっかり伝えておくこと

で、高校生への出前講義では有効なのではないかと思った。

2) 研修全般や HIV 看護について

- ① 今回、HIV 看護だけでなく、HIV 感染している方の話を聴いたりすることができて、すごく貴重な体験ができました。自分にできることは何かを考えて、今回の学びの内容をスタッフに伝えたいと思います。
- ② 私自身の視野の狭さを恥ずかしく思いました。3日間の中で、大勢の講師の先生のお話を聞いて勉強になりました。もっともっと、視野を広げたいです。
- ③ もっとシンプルな気持ちでやっていきたいと思いません！願わくば、当県でも出前講座を・・・
- ④ 研修全般を通して、楽しい雰囲気の中で進められたことで、非常に楽しく学ぶことができた。
- ⑤ 多くの講義を聞いて、知識を得た反面、さらにわからなくなった事もできました。（セクシュアルマイノリティについて）HIV 看護に関しては、以前より感じていた事ですが、若年層からの予防が大切だと思います。今後、このような研修終了者が医療職の立場としての予防啓発が必要だと強く感じました。
- ⑥ まだまだ、医療者の中にも（特にベテランほど）偏見が多く見受けられます。正しい知識を伝達していきたいと思います。また、高校生や老健施設へも勉強会をして、社会に貢献できるというなと考えています。出身高校に入りたいと思いました。
- ⑦ 基本的なことや、奥深い事などたくさんたくさん学ぶ場に来て、先生方に感謝しています。
- ⑧ 今後、患者さんを受け入れるため職員教育、委員会でも活動していきます。相談ごとがあれば、美奈子先生にメールさせていただきます。
- ⑨ 新人の頃に先輩に「HIV 看護ほど人の性について関わる看護はない」と言われたが、本当にその通りで、性の多様化にも時代と一緒に対応していかないといけないものだと感じた。以前、ゲイやレズビアン、ニューハーフなどは「第3の性」として聴いたことがあるが、今はそれ以上に、たくさんの性があり、それぞれの性を持って生活しているとお話を聴きながら思った。今後も HIV 看護について勉強し、生かしたい。また地域へも還元していきたい。
- ⑩ 普段は HIV に感染された患者さんと関わることが多かったのですが、今回、予防に関しての態度・知識・技術を学び「予防に対し、興味をもてました。3日間、ありがとうございました。
- ⑪ 自分は大丈夫!!と何の確信もないまま今まで生きてきました。今回の研修で初めて HIV 陽性で元気に過ごされている方にお会いしました。これまでもきっと、自分の周りにも HIV 陽性だけと言えなくて苦しんでいた人がいたのかな?と・・・これからは心のバリアフリーで生きていこうと思います。HIV/AIDS は全然怖くな

- いじゃん！！と心から思いました。ありがとうございました。
- ⑫ 実際 HIV 陽性の方の講演を聞き、自分が知らないことがあります、目からうろこ状態でした。3日間という短い研修でしたが、HIVをより深く学ぶことができました。
- ⑬ もっともっと支援者である私たちが、しっかりとした知識を持って、対応していかないといけないなと思いました。病気のことだけでなく、とりまく様々なことも知っておかないと、当事者の方に寄り添うことは難しいと感じました。
- ⑭ 私自身、HIVに対して、莫大な不安があったが、3日間研修に参加してみて、正しく理解していたら（感染予防も含め）大丈夫なのだというのを学んだ。実際はHIV患者を受け入れていないため、将来受け入れるようになったら、他のスタッフにも正しい知識を提供できるようにしたいと思った。多方面の方の講義を受けて、いろいろな考え方が知れてよかったです。
- ⑮ 自分の学びを深めたいと思い、参加しました。内容は非常に現実に即しており、また実際現場で活動されている方のお話を伺い、びっくりすることもなるほどと思うこともたくさんありました。3日間終えてみて、この研修に参加して、よかったと心から言えると思います。少しずつでも、自分の周囲に語り、関心をもってもらえる人を一人ずつでも増やしていけるといいなあと思えた。
- ⑯ 職場で行けと言われて来た研修でしたが、とても楽しかったです。子どもが二人（新社会人と大学2年生）いますが、こんな話はしてもらってないだろうし、私もしたことがなかったので、早速したいと思います。HIV感染患者の高齢化についても深刻だと感じました。私自身、遠くに感じていたことが、とても身近だったことに気づき、関心が深まりました。ありがとうございました。
- ⑰ はじめはほんの少しの関心で研修に参加しましたが、3日間を終えて、10倍も20倍も関心を持つきっかけになりました。今後の自分の知識を深めて、HIVに関わる、また、予防出来る仕事をする事が私の目標になりました。本当に楽しい研修でした。ありがとうございました。
- ⑱ HIV看護の深さを学び、自分の考えが変わったと研修を通して思う。自分の考えを見つめ直すいい機会になった。
- ⑲ HIVについて、とても深いところまで学ぶことができました。これから看護師として働いていく中で大切な考え方や知識を学ぶことができました。10人10色の性があることを前提に、これから周りの人や患者さんと関わっていきたいと思います。3日間、ありがとうございました。
- ⑳ 3日間、とても愛情溢れる講義ばかりで感動しました。新しいことを始めたり、自分がリーダーとなることは面倒くさいし、苦手だったけど、今日の恩返しのつもりでできることを始めていきたいと思います。職場を変えるのは難しいので（私にとってはハードルが高いので）出前講義から始めてみようと思います。また、近所の青年たちに性教育していきたいです。
- ㉑ HIVについて学び始めて4年ほどたちました。どの研修も最新のガイドラインや薬についてなどが多かったです。今回、性について、こんなに考えた研修会ははじめてでした。一人一人が違うとか、わかっていたようで、わかっている自分を自覚しました。3日間、ありがとうございました。
- ㉒ HIVの学問的な理解だけでなく、実際に社会で活動している方がたの話が聞けて、本当に貴重な体験ができたと思います。私を含め、この研修を受けた全ての方々にとって、新しい行動へのきっかけになっていると思います。ありがとうございます。
- ㉓ 自分自身、HIV患者さんに対して偏見を持っていないつもりで仕事をしていましたが、今回の研修に参加して、自分は今まで偏見を持っていたことに気づきました。身近な若年者の性の乱れもみっていますが、高校生への教育はとてもよい講義・活動だなと思います。
- ㉔ 内容の充実した3日間でした。興味・関心が深まり、さらに知識や情報を深めてみたいという動機付けにもなりました。参加費が無料ということに終始驚いています。貴重な研修に参加させていただきまして、ありがとうございました。
- ㉕ 今回の3日間だけで、他の人に話ができるのかどうかはわかりませんが、とりあえず、スタッフに中学生の男の子のいる人が二人いるので、その子どもに正しいコンドームの付け方から伝えたいと思います。
- ㉖ 研修の日程として、3日間のうち2日が土日であったら良いと思いました。医療従事者だけでなく、多方面から講師の方がお話してくださって、とても充実した研修でした。ありがとうございました。
- ㉗ HIVについては、まったく知らないことがたくさんあったけど、研修を受けて、自分が思っていた以上に奥が深いということが分かった。いろいろな考えを持った人がいること、正解はないということ、だからこそ、相手に興味や関心をもって、理解しようとする気持ちが大切だと思った。いつでもそのような気持ちをもてるように心がけたい。
- ㉘ AIDS発症の患者様の看護を行っているが、もっとできることがあると学んだので、これからの時間を大切に寄り添えるよう努力していきます。性教育は学校まかせにしている親御さんも多いので（私は性教育を子にしていますが）、親も含め家庭でのあり方から関わると良いと思いました。

9 研修後の修了生の活動について

①自施設での伝達講習や勉強会の開催

研修後は職場で伝達講習を行なった者や、中学高等学校に出向いて、中高生に性教育をおこなった者がいた。また、ゲイのミーティングに参加した者もいた。自施設の看護師や医師と協力して、HIV/AIDSの診断・治療について勉強会を開催した者もいた。

②中高生への出前講義の見学・部分実施・主になって実施

研修後に複数回見学のあと、部分的に実施したり、50分の授業を1人で実施したり、活動が広がった。

③ HIV サポートリーダー養成研修の講師

研修終了後に講師として「セクシュアリティ概論」「思春期のセクシュアリティ」「DVDを使用した出前講義」「コンドーム達人講座」を担当した。今後も、修了生が興味のある講義について、担当できるように調整したい。

10 研修修了バッジ

研修修了生が、名札や白衣の襟に着けて、HIV 予防啓発についてアピールできるようにオリジナルのバッジを作成した。ロゴの「やるやん、大阪」は、第1回目の修了生の1人が、最終日の自由画発表の際に発したことばである。「大阪は HIV 感染者が増加しつづけているが、少しずつ予防啓発活動を継続して、他の地域から、『やるやん、大阪』と言ってもらえるように、がんばりたい」という修了生のことばを忘れないで、身近な人たちへ、できるところから HIV の予防とケアについて伝えていきたい。



第11回 HIV サポートリーダー養成研修 調査票

研修、お疲れ様でございました。この調査は、皆様のご意見を取り入れて、次年度の研修計画の検討をさせていただくために実施するものです。この調査の結果については、厚生労働科研の報告書や関連学会で発表する予定ですが、個人が特定されるようなことはありません。報告書は次年度の6月に発行されますので、ご要望があれば、郵送いたします。記入後の調査票を、回収箱に投入していただくことによって、調査への同意とさせていただきます。

次の1～3について、項目ごとに該当する番号に○印をつけてください。

1. 研修目標の達成度について

研修目標：セクシュアリティ、HIV感染症について広く学び、HIV陽性者への初期対応、高校生へのHIV予防出前講義に必要な態度・知識・技術を得る

1 達成できた	2 ほぼ達成できた	3 一部達成できた	4 達成できなかった
---------	-----------	-----------	------------

2. 講義の内容について

	【理解の程度】			
	1. 理解できた	2. ほぼ理解できた	3. 一部理解できた	4. 理解できなかった
1日目	大阪のHIV感染の現状			1・2・3・4
	セクシュアリティ概論			1・2・3・4
	思春期のセクシュアリティ（健康課題）			
	HIV陽性者の理解と 初期対応			1・2・3・4
2日目	HIVの最新治療			1・2・3・4
	薬害エイズ			1・2・3・4
	若者へのHIV/AIDS予防教育			1・2・3・4
3日目	DVDを使用した出前講義			1・2・3・4
	コンドーム達人講座（知識と技術）			1・2・3・4
	HIV陽性者の支援（地域、ピア）			1・2・3・4

3. 研修前後の自分自身の態度の変化について

	1. 大いにそう思う 2. そう思う 3. あまりそう思わない 4. まったくそう思わない			
	研修前	研修後		
1 性のことを人前で話すのは恥ずかしい	1・2・3・4	1・2・3・4		
2 自分自身の性についてきちんと向き合っている	1・2・3・4	1・2・3・4		
3 HIV看護について興味を持っている	1・2・3・4	1・2・3・4		
4 性欲は基本的な欲求の一つであり大切にしたい	1・2・3・4	1・2・3・4		
5 HIV予防教育の出前講義に積極的に関わりたい	1・2・3・4	1・2・3・4		
6 セクシュアルヘルスの増進について学びたい	1・2・3・4	1・2・3・4		
7 職場で、HIV陽性者のケアへの準備をしたい	1・2・3・4	1・2・3・4		
8 グローバルな広い視点で看護を考えている	1・2・3・4	1・2・3・4		
9 他者と深く関わることは喜びである	1・2・3・4	1・2・3・4		

4. アクティビティ（フリスビー・感染シミュレーション・粘土製作・自由画）についての感想をご自由にお書きください。

5. 研修全般や HIV 看護についてのご意見をお書きください

調査票へのご記入をありがとうございました。

エイズ研修 アンケート調査

年齢：20 歳代 30 歳代 40 歳代 50 歳代 60 歳代 70 歳代

職種：()

介護サービスの経験年数： 1 年未満 1～5 年 6～9 年 10 年以上

あてはまる数字に○で囲んでください 1. 大いにそう思う 2. そう思う 3. どちらでもない
4. あまりそう思わない 5. まったくそう思わない

	研修前	研修後
1. HIV に感染しても、すぐにエイズにならない	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
2. HIV に感染しても、薬を飲み続ければ、長生きできる	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
3. HIV は便・尿・汗の中にはいない	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
4. 握手する、軽いキス、一緒に食事をするなどで、HIV に感染することはない	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
5. HIV の感染率は、B型肝炎やC型肝炎よりもずっと低い	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
6. HIV に感染するのは、特殊な人たちである	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
7. HIV の予防にコンドームは有効である	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
8. HIV 感染を理由に介護を拒否するのは人権侵害である	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
9. HIV 感染を理由に就労を拒否するのは人権侵害である	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
10. 職場では必要なときに、手洗い・マスク・手袋を使用したスタンダードプリコーションを行っている	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
11. 施設内感染予防について心配なときに、相談できる人がいる	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
12. 入所者の個人情報に対する守秘義務を守っている	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
13. 性欲は基本的欲求であり、大切にしたい	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
14. コンドーム装着は性行為時のマナーである	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
15. 同性愛は異常なことではない	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
16. HIV 陽性者の入所・利用希望があれば受け入れたい	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5

研修の感想などをご自由に記入してください



地方における病院・福祉療養施設間の HIV 診療連携モデル構築に関する研究

研究分担者：高田 清式（愛媛大学医学部附属病院 総合臨床研修センター・感染症内科）

研究協力者：末盛浩一郎（愛媛大学医学部附属病院 感染症内科）

村上 雄一（愛媛大学医学部附属病院 感染症内科）

中西 英元（愛媛大学医学部附属病院 感染症内科）

井門 敬子（愛媛大学医学部附属病院 薬剤部）

木村 博史（愛媛大学医学部附属病院 薬剤部）

中村真理子（愛媛大学医学部附属病院 看護部）

小野 恵子（愛媛大学医学部附属病院 医療福祉支援センター）

若松 綾（愛媛大学医学部附属病院 医療福祉支援センター）

石川 朋子（愛媛大学医学部附属病院 医療福祉支援センター）

中尾 綾（愛媛大学医学部附属病院 感染症内科）

研究要旨

地方における病院と福祉療養施設間の HIV 診療の充実および連携について検討する目的で、急性期病院から福祉施設までの連携モデルの形成と組織構築を研究・検討した。今年度は具体的に、療養型病院および福祉施設にて出張講義を行い HIV 診療や介護の意識改善・啓蒙に実践的に努めた。また、講義の際のアンケート調査等を通じ地方の HIV 診療に関する連携の実態を把握し検討した。高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および調査にて、75%が施設として受け入れ可能との結果を得た。さらに、出張講義においても回答者の69%が HIV 感染を恐れない、82%が受け入れ可能の意見があり、良好な結果を得、実際に自活不能な3例の HIV 感染者の福祉連携が円滑に行い得た。また、本研究を通じ地方における HIV 診療および福祉連携の実態および問題点が詳細に把握できた。

研究目的

高齢化社会を迎えつつある地域において、HIV 診療に関する福祉連携のあり方の研究を行い、診療の充実を図ることを目的とした。さらにその急性期病院から福祉施設までの連携を行う際の具体的事項や方策、提案を纏め上げ全国に発信し HIV 診療や福祉連携に関して、1つの地方のモデルとしての役割を担うことを目的とした。

研究方法

急性期病院から福祉施設までの連携モデルの形成と組織構築を研究・検討した。具体的には急性期病院の整備、療養病院および福祉施設にて出張研修を通じて HIV 診療や介護の意識改善・啓蒙に努めた。また、県内外のアンケート調査等を通じ地方の HIV 診療に関する連携の実態を把握し問題点を検討した。

（倫理面への配慮）

患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにした。

研究結果

【1】愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および実態調査

平成27年1月27日に愛媛県立美術館講堂において、県（健康増進課）の協力のもと県内の高齢者施設から現場の福祉・介護担当者に集ってもらい、HIV 感染症等に関する研修会を開催した。その結果、63名の参加者が得られ、HIV 感染症を中心に初心者にも判りやすく講演を行った（講演者：高田清式）。今回、愛媛県には高齢の HIV 感染者が多い実情や今後介護の面で問題になると考えられる HIV 関連認知機能障害（HAND）についても話題提供した。参加者からは「HIV についてよく理解できた」「エイ

ズ患者の介護を具体的に行うことが、もはやさせまわっていると実感した」、 「あまり感染に恐れる必要はない」などと比較的前向きな意見があり、 HIVの知識啓蒙とともに参加者各自に対して HIV感染者を支援することの自覚を促すことが実現できた。研修会の終了時に HIV感染者の福祉・介護についてアンケート調査を行った。その結果（回答数53名：約84%）、 HIV感染をどう感じたか（特に、恐れ不要と感じたか）に関しては、全く恐れない（19%）、治療されていれば恐れない（57%）で計76%が恐れ不要と感じており、研修会による啓蒙の効果もあってか比較的 HIVに関し前向きに捉えてくれていると考えられた。また自施設への受け入れに関しては、積極的に受け入れる（11%）、薬で安定していれば受け入れる（45%）、不安は強いが受け入れる（19%）など温度差はあるものの、計75%が受け入れ可能との意見であった。

【2】福祉療養施設への出張研修、意見交換

積極的に HIV感染者の介護・受け入れを推進するために地域の療養型病院および福祉施設へ出張講義を行った。その結果、計6病院・施設への出張にて、計697名の参加者に当院から医師・看護師・薬剤師・MSWの HIV診療チームとして出向して講義が行えた（図1）。

各出張講義の終了時に HIV感染者の福祉・介護についてアンケート調査を行った。主な内容は、① HIV感染をどう感じたか、②自分の療養型病院・介護施設への入所をどう思うか、などに関してであった。その結果（回答数187名）、① HIV感染をどう感じたか（特に、恐れ不要と感じたか）に関しては、全く恐れない18%、治療されていれば恐れない51%で計69%が恐れ不要と感じており、当方の積極的な姿勢と啓蒙の効果もあってか比較的 HIVに関し前向きに捉えてくれていると考えられた（図2）。

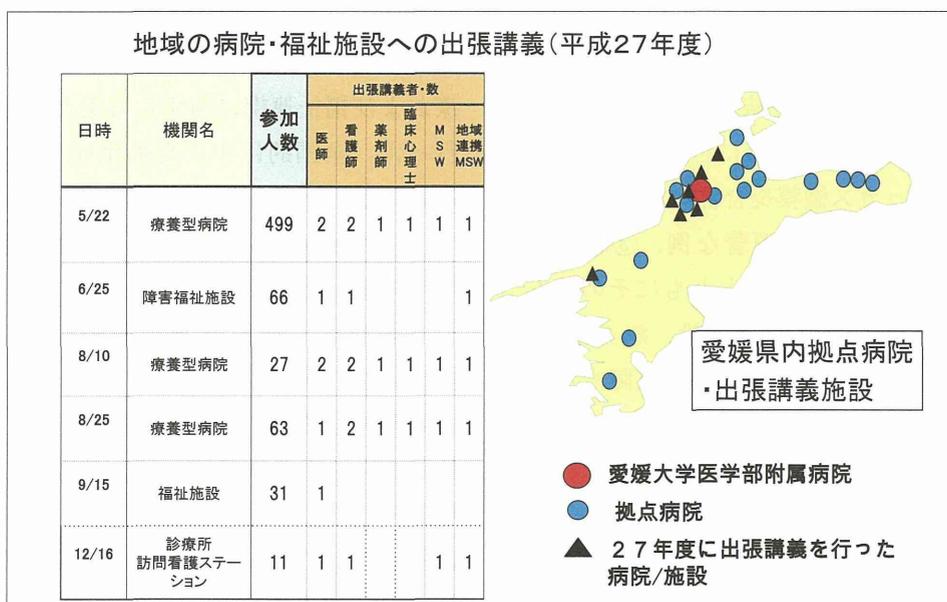


図1 地域の病院・福祉施設への出張講義（平成27年度）

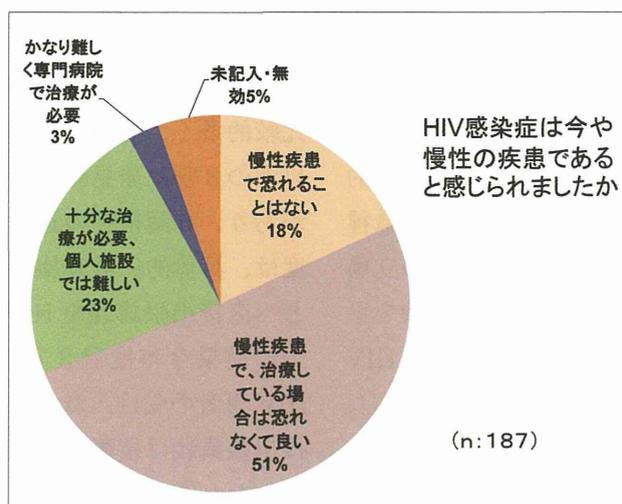


図2 HIV感染をどう感じたか、恐れ不要と感じたか

さらに、各自の療養型病院や介護施設への入所・受け入れをどう思うかに関しては、どんな状況でも受け入れる～不安は強いが受け入れるなどのある程度意識の差はあるが、82%が施設として受け入れ可能との意見を得た（図3）。

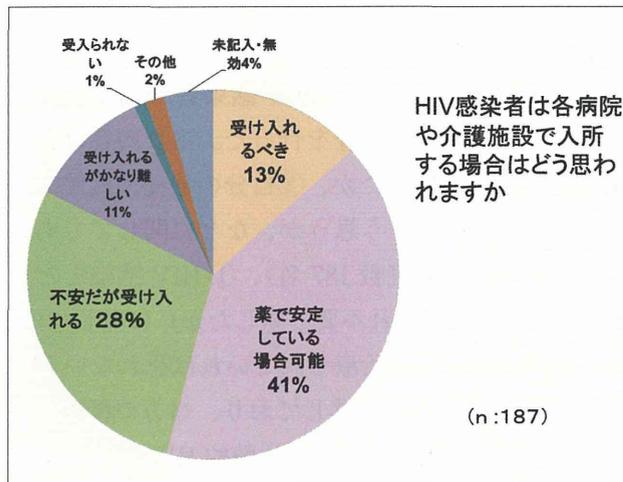


図3 自病院・施設でのHIV患者の受け入れについて

なお、今年度はこのような出張講義を、実際の患者受け入れも踏まえて行った結果、自活不能な3名の患者の受け入れ・転院が円滑に行えた。具体的には、①クリプトコッカス髄膜炎合併のエイズ例、②HAND (MND) で認知症の顕著な例、③脳リンパ腫合併例で、いずれも出張講義とともにその後も当院と密に連携しつつ、在宅支援施設、療養型病院、診療所/訪問看護などにて特に大きな支障もなく療養生活が可能になっている。

【3】在宅介護職員の実施研修

今年度は、今後HIV患者の介護に直接あたってもらうことを想定し、計6名の在宅介護看護師に各々1週間ずつ研修会として、当院のHIV患者の実施研修と講義・討議を行った。

【4】拠点病院などを対象とした教育講演会、意見交換

HIV感染者の増加に伴う地域の支援の充実を目的に、保健所職員、拠点病院および多くの立場・職種の有識者（メディア/学校/会社/商業などの立場から選出）とHIV感染予防対策に関する協議会を平成27年10月6日に松山市保健所にて開催し、HIV感染に関する現況報告（演者：高田清式）を行い、各自の立場での意見交換を行った。さらに、診療レベルの向上および地域のHIV診療・福祉の現実を多くの医療関係者に知ってもらう目的で、平成28年

2月3日に愛媛県のHIV診療ネットワーク会議（県全域の拠点病院が参加）を開催し、県内の他病院のHIV診療状況を検討しあうとともに『愛媛県のHIV感染対策の現況報告』というテーマで、講義・討議を行った。

【5】地域で実践的なポケット版小冊子の作製

地方でHIV/エイズ患者を積極的に介護施設で分け隔てなく介護をしてもらうための試みとして、介護時のHIV感染予防対策なども折り込んだ、愛媛および四国での実用的な（最新の愛媛や四国の現況や感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）HIVに関するポケット子（18x10cm大）を作製し県内および四国の主だったHIV診療施設に配布した。

考察

地方における病院・福祉療養施設間のHIV診療連携として愛媛県をモデルに、地方におけるHIV診療および福祉連携に関する啓蒙とともに実態調査を行った。全国的に少子高齢化社会になりつつあり、高齢化が一步進んでいる愛媛県および四国は、今後のHIV感染者の高齢化と福祉対策を考える上で代表的なモデル地区と考える。

当院では平成27年末現在累計150名以上のHIV診療経験があり（県内の大半のHIV診療を担当）、愛媛県の中核拠点病院の立場にある。また、四国の他県からも患者は通院している現況である。HIV感染者・エイズ患者が全国的に増加する傾向にあるが、四国も例外ではなく、愛媛県においても新たに毎年10名以上の新規感染者・患者が報告されており、かつ高齢者も多くHIV診療の充実は早急に迫りつつある課題であると考えられる。さらに愛媛県をはじめとする地方においては、高齢のHIV/エイズ患者が比較的多く、愛媛県において平成27年末現在50歳以上の8割は発見時にエイズ患者であるという現実があり、介護福祉の連携は緊喫の課題である。今年度は、具体的に計6施設の療養型病院・介護施設などへ直接出張講義をHIV診療チームとして行った。その結果今年度計3名の介護や福祉環境を要するHIV患者の受け入れが円滑に行い得たことは、直接出張講義は積極的な連携の1方法として意義が高かったと考える。さらに、出張講義の際のアンケートで計69%は「治療等が良好なら不安はない」（う

ち18%は治療に関係なく不安はない) および82%が「施設として受け入れ可能」との比較的好感触な結果を得たことは、緊喫の課題である福祉連携の拡大・充実を今後円滑に図り得る可能性が高く期待できると考えられた。なお、高齢化の進んだ地方においては、今後HIV感染者の高齢化とともに薬剤の副作用を考慮した内服継続・薬剤の減量なども重要な観点として検討していく必要があると思われ今後の1課題と考える。

いずれにしてもHIV患者の早期発見のための留意点を強調および患者の増加を抑制するためのHIV感染に対する予防啓発とともに、現実の感染者に対して各地域・病院においてHIV診療の向上と福祉の連携体制の充実を図ることは重要な課題であり、今後もさらに指導・教育および現況を把握するための調査研究に努めたいと考える。また、今年度は愛媛県の高齢者施設におけるHIV感染症等に関する研修会を全県下に呼びかけて開催しHIV感染者に対する支援者としての自覚を促すことができたことは意義深い。さらに研修会後の実態調査においては、参加者の約4分の3程度は「治療等が良好なら不安はない」(うち19%は治療に関係なく不安はない) および75%が「施設として受け入れ可能」との比較的好感触な結果を得たことは、緊喫の課題である福祉連携の拡大・充実を今後円滑に図り得る可能性が高いと考えられた。さらにより具体化した福祉連携をめざし、今年度は地方で実用的な(愛媛や四国の現況や感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた) HIVに関するポケット冊子を作成・配布した。今後現場での意見も聞きつつさらに改良した冊子を将来は作製したい。

高齢化にあたり、HIV診療および福祉連携のあり方について具体的な今年度の出張研修の結果等を踏まえ、さらに充実を努め、高齢化率の高い愛媛県のような地方においても、早期発見や重症患者の治療が十分に行われるように常々心がけて、自活的な生活が1人では送れないHIV感染患者に対し、福祉連携が円滑にできるように努めていく必要があると考える。さらにその福祉連携のモデル地域として今後も研究・報告を全国に発信していきたいと考える。

結論

HIV診療および福祉連携に関し積極的に出張講義などを行い個々に具体的な問題を整理し知識・経験を共有でき、各施設で3例を受け入れ得た。高齢化社会を迎え介護・療養が必要なHIV感染・エイズの増加に対応するために、地方での診療・福祉連携の充実は不可欠であり研究を継続しさらに向上に努めたい。

健康危険情報

該当なし

研究発表

1. 論文発表

高田清式、村上雄一、中西英元、末盛浩一郎、山之内純、中尾綾、西川典子、地域におけるHIV診療と認知機能障害に関する研究、愛媛医学34(2): 99-102、2015

2. 学会発表

村上雄一、末盛浩一郎、山之内純、東太地、薬師神芳洋、長谷川均、高田清式、安川正貴、愛媛県におけるHIV外来診療の実態調査. 第89回日本感染症学会、京都、2015年4月

高田清式、診断が不明で他院から紹介された梅毒の3症例. 第11回日本病院総合診療医学会、奈良、2015年9月

高田清式、山之内純、末盛浩一郎、村上雄一、中西英元、安川正貴、中尾綾、辻井智明、西川典子、木村博史、井門敬子、藤原光子、中村真理子、小野恵子、若松綾、HIV関連神経認知障害(HAND)における髄液中のネオプテリン量とART後の変化. 第29回日本エイズ学会、東京、2015年11月

若松綾、坂本早輝、滝本麻衣、中村真理子、岩村弘子、藤原光子、小野恵子、中尾綾、末盛浩一郎、村上雄一、木村博史、井門敬子、高田清式、愛媛県における訪問看護師に対する実地研修の現状. 第29回日本エイズ学会、東京、2015年11月

岡崎玲子、蜂谷敦子、渦永博之、渡邊大、長島真美、貞升健志、近藤真規子、南留美、吉田繁、小島洋子、森治代、内田和江、椎野禎一郎、加藤真吾、豊嶋崇徳、伊藤俊広、猪狩英俊、上田敦久、石ヶ坪良明、古賀一郎、太田康男、山元泰之、福武勝幸、古賀道子、西澤雅子、林田庸総、岡慎一、松田昌和、服部純子、重見麗、保坂真澄、横幕能行、中谷安宏、田邊嘉也、白阪琢磨、藤井輝久、高田昇、高田清式、山本政、

松下修三、藤田次郎、健山正男、杉浦互、岩谷靖雅、吉村和久、本邦の新規 HIV AIDS 診断症例における薬剤耐性 HIV の動向. 第 29 回日本エイズ学会、東京、2015 年 11 月

井門敬子、木村博史、吉野宗宏、岩館文佳、工藤正樹、阿部憲介、内山真理子、石原正志、日笠真一、治田匡平、木村智子、常友盛勝、井上千鶴、藤井健司、嶺豊春、屋地慶子、田中亮裕、荒木博陽、薬学部実務実習における HIV 実習普及に向けての検討. 第 29 回日本エイズ学会、東京、2015 年 11 月

知的財産権の出願・取得状況（予定を含む）

該当なし



HIV 陽性者の地方コミュニティでの受け入れに関する研究

研究分担者：榎本てる子（関西学院大学 神学部）

研究協力者：青木理恵子（特定非営利活動法人 CHARM）

福嶋 香織（特定非営利活動法人 CHARM）

狭間明日実（特定非営利活動法人 CHARM）

伊達 直弘（特定非営利活動法人 CHARM）

小西加保留（関西学院大学 人間福祉学部）

平田 義（社会福祉法人 イエス団 常務理事）

出上 俊一（社会福祉法人イエス団神戸高齢者総合ケアセンター）

中谷 幸子（社会福祉法人イエス団神戸高齢者総合ケアセンター真愛
ケアハウス樟葉新生園）

山本 誠（社会福祉法人聖隷福祉事業団 宝塚せいれいの里）

井上 洋士（HIV Futures Japan プロジェクト代表／
放送大学 慢性看護学・健康社会学）

細川 陸也（名古屋市立大学 地域保健看護学）

片倉 直子（神戸市看護大学 地域・在宅看護学）

市橋 恵子（日本バプテスト看護専門学校）

梅田 政宏（株式会社にじいろ家族）

澤田 清信（つぼみ薬局）

白野 倫徳（大阪市立総合医療センター）

来住 知美（大阪市立総合医療センター）

岡本 学（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター）

研究要旨

本研究は関西圏において、HIV 陽性者と高齢化へのセイフティーネット構築のために必要な環境作りとして、医療に手厚い高齢者施設の建設と NPO による地域での HIV 陽性者に対する生活・精神的支援の在り方を具体的に検討していく。本年度は、研究① 医療に手厚い高齢者施設の建設を目指して—フォーカスグループによる研究会の開催と、研究② NPO による地域で生活する HIV 陽性者支援の可能性—聞き取り調査を実施した。研究①では、普段定期的集まる機会の少ない医療・福祉・介護・NPO・HIV 陽性者が集まり、医療と連携した福祉施設の運営の制度的課題、福祉施設の現状、NPO の働き、そして HIV 陽性者にとっての高齢化に伴う不安などを話し合い、今後の施設建設の具体化に向けての話し合いを行った。結果として、医療に手厚い高齢者施設の建設に必要な医療と福祉の連携、制度では補えないサービスを提供する NPO の役割を確認する機会となった。また HIV 陽性者自身が自ら参加し、環境を創造する過程を協働することの重要性を確認する機会となった。研究②では、特定非営利活動団体 CHARM（以下 CHARM）が関わってきている 60 - 70 代の地域で一人暮らしをしている HIV 陽性者に対して、配食支援や見守り支援を行うため、定期的に継続して自宅を訪問し、同時に聞き取り調査を行った。聞き取り調査の結果、HIV Futures Japan プロジェクトの調査結果と同様に、HIV 陽性者の抱える老後の不安として「病状に関する事」、「支援者の不在」、「在宅サービス、施設入所」があげられる。HIV/AIDS に関する外的スティグマおよび内在化してしまっているスティグマ（Felt Stigma）が HIV 陽性者の老後を孤立させ、支援につながりにくい環境を造り出していると思われる。高齢期 HIV 陽性者同士の出会える場、居場所作り、地域の医療施設や介護施設と連携し、HIV 陽性者の受け入れ体制を整備していく事も地域団体の重要な役割である事が分かった。また、高齢になって